

教育研究総論

1 研究主題・研究副題

豊かな「学び」をつくる子どもの育成 ～学びを拓く子どもの姿を求めて～

一貫教育主題を受けて、教育研究の主題を「豊かな『学び』をつくる子どもの育成」とした。豊かな「学び」をつくる子どもについては、思いやりをもって、集団の一員であることを自覚し、知識・技能、学び方を習得し、これを活用する思考力・判断力・表現力を身に付け、課題解決を目指して、豊かなものの見方や考え方、自分自身への気付きの獲得を求めて、学び続けていく姿であると考えた。

私たちは、幼小中一貫したすべての教育活動を通して、豊かな「社会生活」を創造する資質や能力を育成したいと考えている。将来、家庭・職場・地域・社会における問題や状況に対して、他者との合意形成を図りながらよりよい方法を見付け出し、協働的に自律的に行動できる力を、子どもたちは身に付けなければならない。11年間の附属学校園での学びを礎として、自ら学びを拓く人間になって欲しいという願いをもって、私たちは一貫した教育活動を行っている。豊かな学びをつくり、豊かな「社会生活」を創造する子どもを育成するためには、これまでの学びを自らいかしながら、新たな学びをつく



図1

りあげていく子どもを育てることが大切だと考えた。このような子どもの姿を私たちは、「学びを拓く子どもの姿」と表し、研究主題・研究副題を、「豊かな『学び』をつくる子どもの育成 ～学びを拓く子どもの姿を求めて～」とした(図1)。

保育・教科では、確かな学力の育成を目指して学び合いを通した思考力・判断力・表現力の育成について研究をしてきた。その中で、思考力・判断力・表現力を育て高めるために、学びをいかすことに焦点を当て、そのための保育や授業の在り方を明らかにしていく。学びをいかすためには、学びが断片的なものではなく、構造化されたものになっていなければならない。保育・教科において、研究の基盤に学び合いをおき、学びをいかす経験を積み重ねられるようにし、学びをいかすことのよさを認識できるようにすることを大切にしていきたいことが、将来にわたって自ら学びを拓く人間の育成につながると考える。

2 これまでの研究の経緯

教育研究をより具体的に進めていくために、研究主題に研究副題を付け、次のように年次ごとに研究を深めてきた。

平成20年度 (一年次)	<p>豊かな「学び」をつくる子どもの育成 ～子どもの学びをとらえる～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豊かな「学び」をつくる子どもの姿を確定する。 ・一貫して育てていく力を明確なものにし、その力の育成を目指した子どものとらえの在り方を探る。
平成21年度 (二年次)	<p>豊かな「学び」をつくる子どもの育成 ～子どもの学びをつなぐ～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育・教科で一貫して育てていきたい思考力・判断力・表現力を明確にする。 ・思考力・判断力・表現力を育てる上で有効なかかわり合いの在り方を考察する。
平成22年度 (三年次)	<p>豊かな「学び」をつくる子どもの育成 ～子どもの学びをつむぐ～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育・教科でとらえた思考力・判断力・表現力について発達段階(本学校園が独自に設定している教育研究ブロック等)に応じて整理する。 ・学び合う中で、思考力・判断力・表現力を育てたり高めたりするための保育や授業の構想とそこでの教師のはたらきかけの在り方を探る。
平成23年度 (四年次)	<p>豊かな「学び」をつくる子どもの育成 ～子どもの学びを開く～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育・教科で平成22年度に整理した教育研究ブロックごとの思考力・判断力・表現力を育てるための具体的な活動をイメージし、一貫教育カリキュラムを改訂する。 ・学び合いを通じた思考力・判断力・表現力の育成について、その保育や授業の構想や教師のはたらきかけについてさらに深め、その評価の在り方を提案する。
平成24年度 (五年次)	<p>豊かな「学び」をつくる子どもの育成 ～学びを拓く子どもの姿を求めて～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学び合いを通じた思考力・判断力・表現力の育成について、保育や授業の構想や教師のはたらきかけについてさらに深める。 ・思考力・判断力・表現力を育て高めるために、学びをいかすことに焦点を当て、保育や授業の在り方を明らかにする。

平成20年度の研究で、子どもの思いや願いを教師がとらえ、それによって保育や授業を構想したり、展開する中で取り入れたりすることのよさについて、実践を通して明らかにすることができた。平成21年度から、「確かな学力」の育成を目指して思考力・判断力・表現力の育成に焦点を当て、子どもの学びをつなぐことを研究した。その中で、個と個の学びのつながりや、時系列における個の中での学びのつながり、個と学びの対象とのつながりなど、様々なつながりの重要性が見えてきた。また、思考力・判断力・表現力を育成するために、子どもにかかわり合いをもたせたところ、かかわり合いは思考力・判断力・表現力の育成に有効にはたらくことがわかった。以降、思考力・判断力・表現力を育てたり高めたりするためのかかわり合いを、本学校園では「学び合い」と定義し、学び合いについての研究を深めてきた。平成22年度には、保育・教科でとらえた思考力・判断力・表現力を教育研究ブロックごとに整理し、平成23年度には、これを一貫教育カリキュラムに盛り込むことができた。また、平成23年度は、思考力・判断力・表現力の評価の在り方について研究し、提案した。平成24年度は、学びをいかすことに焦点を当てることにより、思考力・判断力・表現力の育成のための研究を、より一層深めることができ、具体的な手だてとして検討することができた。

3 本附属学校園の教育研究

本学校園では、幼小中一貫教育の11年間の学びを通して、「確かな学力」の育成を目指し、豊かな「学び」をつくる子どもの姿の実現に向けて、思考力・判断力・表現力の育成に焦点を当てて研究してきた。

(1) 思考力・判断力・表現力の11年間のつながり

本学校園全体でとらえる思考力・判断力・表現力を、教育研究ブロック別に次のように定めた。

初等部前期 (4歳～小2)	遊びや生活の中で体験しながら、自分の願い、思い、考えを確かにもったり、それを表したりする力。
初等部後期 (小3～小5)	学習や経験の中で学んだことや感じ取ったことから、自分の思いや考えをもち、他者の考えと比べたり、他者の考えを取り入れたりして、その思いや考えを相手を意識して表したりする力。
中等部 (小6～中3)	習得した知識・技能や経験の中で感じ取ったことから、分析的な見方や総合的な見方を駆使し、自分の思いや考えをつくったり、集団を意識して発信したり実践したりする力。

また、保育・教科ごとに、思考力・判断力・表現力を教育研究ブロック別に整理し、11年間のつながりを明らかにした。その結果、保育や各教科の特徴を踏まえた上で、保育・教科の枠組みを超えた子どもの発達段階の特性があることが次のように見えてきた(図2)。

初等部前期では、子どもの学びの対象となるものが遊びや生活と密接に関係している。初等部前期の思考力・判断力・表現力は、「やってみたい」という自発的な学びの意欲が追求の原動力となり、没頭して遊んだり体験したりすることで、自分なりの思いや考えを確かにもつようになり、それを素直に伝え合おうとする力であるといえる。伝え合う手段としては、言葉だけでなく、絵を描いたり身振り手振りなど体を使ったりする表現もある。

初等部後期では、子どもの学びの対象は、身の回りの生活に関わる具体物である。この発達段階の子どもの思考力・判断力・表現力は、学びの対象に直接はたらきかけて自分なりの考えを明確にし、友だちの考えと比較したり考えを取り入れたりしながら、多様な表現方法を用いて工夫したり説明したりする力であるといえる。

中等部では、子どもの学びの対象は、社会的なものや抽象的なものなど広がりを見せる。この発達段階の子どもの思考力・判断力・表現力は、学びの対象に対して、自ら問題を見だし、様々な考えを取り入れながら論理的に考えたり一般化しながら最適な方法を見だし、相手に伝わるように発信していく力であるといえる。

思考力・判断力・表現力は互いに関連し合って育成される力であり、様々な教育活動における学びが関連し合って、11年間でつながって育成される力である。初等部前期の思考力・判断力・表現力が素地となり発達段階を踏みながら、何度も問い直しをしたり学び直しを繰り返したりすることでじっくりと育成されるものと考えている。

(2) 思考力・判断力・表現力の評価

思考力・判断力・表現力が育ったかどうかは、主に子どもの姿からとらえ分析した。さらに、個々の思考力・判断力・表現力の育ちや高まりを、できるだけ客観的にとらえる方法を研究した。各教科・保育の実践では、思考力・判断力・表現力について、具体的な評価規準・評価基準を設定し評

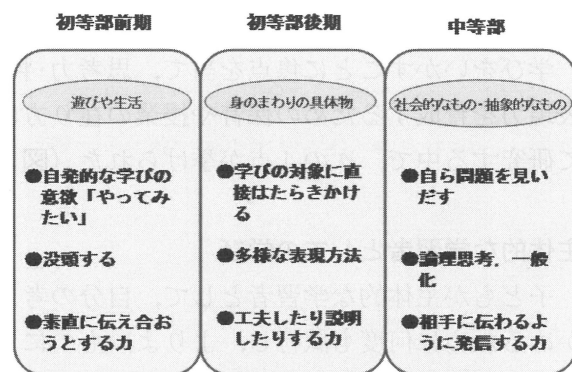


図2：思考力・判断力・表現力の発達段階における特性

価をした。思考力・判断力・表現力が1時間で大きく変わることはないと考え、単元を通して思考力・判断力・表現力の高まりを評価をすることにした教科が多かった。思考力・判断力・表現力を評価する評価資料は、言葉・式・図・表・絵・グラフなどを使用した発言や記述によるもので、作品やレポート、日記やふりかえりやイメージマップなど様々なものがある。一人一人の子どもを評価することは容易なことではない。しかし、評価基準に基づいて一人一人の分析を行ったことは、子どもの思考やその変容を的確にとらえることになり、学び合いの場面ではたらきかけに取り入れることに役立った。また、子どものふりかえりや自己評価は、子ども自身が自分の変容を認識することにもつながった。

中央教育審議会初等中等教育課程部会(2010)「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」には、「各学校における学習評価は、学習指導の改善や学校における教育課程全体の改善に向けた取組と効果的に結び付け、学習指導に係るPDC Aサイクルの中で適切に実施されることが重要である。」と述べられている。本学校園においても、学び合いの評価を、授業改善や個に応じた指導の充実、指導計画等の改善に役立てるものにしたと考えている。

(3) 思考力・判断力・表現力を育成するために

① 学びをいかす

学びをいかすことに焦点を当て、思考力・判断力・表現力を育成するための保育や授業の在り方について研究する中で、次の4点が挙げられた(図3)。

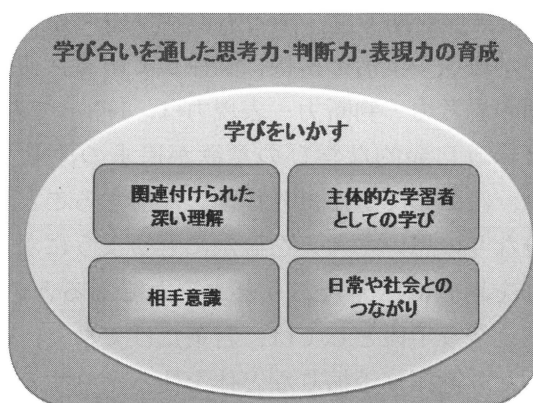


図3

主体的な学習者としての学び

子どもが主体的な学習者として、自分の考えを確かめるために何度も試行し、よりよいものにしようとするとき、学びをいかす姿が見られる。教師は、子どもが主体的な学習者となるような動機付けをして、子どもが主体的に試行錯誤を繰り返す、学び直したり問い直したりする活動を大切にしなければならぬ。子どもが主体的に学ぶとき、学びが深まり、思考力・判断力・表現力が高まっていく。

また、子どもが自分自身を振り返ることも、主体的な学習者として大切である。子どもが、自分の追求の深まりや広がりや認識し、変容に気付くためのふりかえりは、子どもの学びに対する意識が高まり、主体的に学びをつくりあげたり学びを自覚したりすることにつながっていく。

関連付けられた深い理解

学びをいかすためには、学習したことを根拠にして説明をすること、比較して共通点や相違点を見付けだすこと、学習したことを強く結びつけていくこと、お互いの考えについて評価し合うことなど、思考・判断・表現を伴って、学びをネットワーク化していくような理解が大切なことであると考えられる。子どもは、このような学習によって思考力・判断力・表現力が高まり、自分の学びが明確になり関連付けられた深い理解となつて、次なる場面においても学びをいかすことができると考える。

深い理解となるための具体的な手だてとして、自分なりに表現させることや理由や根拠を問うはたらきかけを大事にすることが挙げられる。また、視覚化していくことで、互いの考えについて評価し合ったり、よりよいものを求めていくことも大切である。さらに、関連付けを促すようなものと出会わせ、子どもが関連付けたことを自覚できるように構想することも重要である。

相手意識

学びをいかす子どもの姿を求めるとき、相手意識も大切である。本学校園は、思考力・判断力・表現力を育てたり高めたりするかかわり合いを学び合いと定義した。この学び合いは、相手によく分かってもらおうと説明をしたり、相手の考えと自分の考えを比較して思考したり、相手意識があるからこそ思考力・判断力・表現力が高まる学びである。学び合いによって課題を解決する活動をするとき、相手の反応を見て受け入れたり、自分の主張を通したり、状況を判断して自分で表現を選択することが大切であり、相手意識が必要不可欠である。教師は、多様な意見が出ると予想される課題を設定したり、評価し合う場を設定したりして、協働的な学びを構想していくことが大切である。発達段階が上がるにつれて、対象とする相手が多様に広がっていく中で、自分が相手に役立っていることを認識することで、さらに学習意欲が高まり、学びをいかす学習が展開される。

日常や社会とのつながり

日常や社会に目を向けて、学びをいかすことを大切にすることも必要である。学びを子ども自身の実生活にいかすために、生活の中での実践に向けて課題を設定させ課題解決を行わせたり、学習したことが自分の身の回りの世界とどのようにつながっているのか考えさせたりすることを大切にす。学びを、直接的に日常や社会の中でのいかすためには、複雑に関連付けられた知識や技能を活用することが必要となり、思考力・判断力・表現力が高まる。また、学びを日常や社会とつなげることは、子どもが、学びの有用性を実感することにもなる。

② 学び合い

思考力・判断力・表現力を育成するための学び合いを成立させるためには、活動や単元全体の構想が重要で、ねらいを明確にし、ねらいに沿った展開の中に学び合いをどう位置付けていくかが大切である。また、個々の子どもに自分の考えを確かにもたせることが重要であることがわかった。つまり、個々の子どもに確かな自分の考えをもたせた上で学び合いの場を設定することが大切であるといえる(図4)。

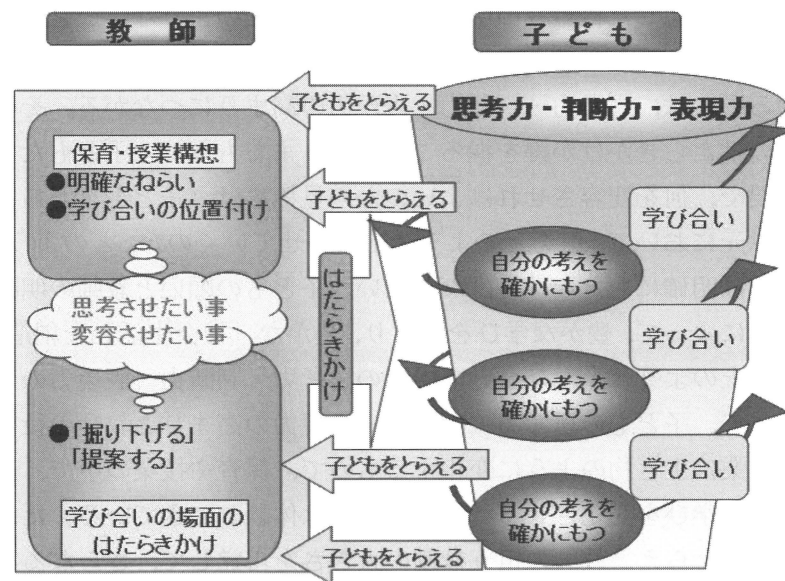


図4

学び合いには、教師と子どもの1対1の関係が大切で、子どもは認められているという安心感の中で、自分の考えを確かにもつようになる。発達段階が上がるにつれて、ペア学習やグループ学習が増えてくる。子どもは、相手を意識して自分の考えが伝わるように思考しながら表現する中で、より確かに自分の考えをもつようになる。このペア学習やグループ学習の他にも、発達段階に応じた個々の子どもに自分の考えを確かにもたせるための手だては様々である。自分の考えを個々の子どもに確かにもたせることは、思考力・判断力・表現力を育成する学び合いを成立させるための、不可欠な要素といえる。また、学び合いの後には、個に返すことが重要である。これにより、子どもは学びの変容を自覚し、学びの意義を認識することになる。

③ 教師のはたらきかけ

思考力・判断力・表現力を育成する上で、学び合いの場面で、教師の「掘り下げる」「提案する」はたらきかけが有効であることがわかった。「掘り下げる」はたらきかけは、子どもの考えが分散したり、ぼんやりしているときに、子どもの表現の背景を探ることで、子どもの考えを明確なものにすることができる。学び合いにおいて、表現された個々の考えを明確にすることは、他者の考えと自分の考えとを比べて共通性や相違性を明らかにし、一つの考えをより深めたり広げたりするという効果がある。「提案する」はたらきかけは、子どもたちの考えが偏ったり不十分だったりしたときに、広げたり違う視点を与えたりするはたらきかけのことで、ねらいに向かった学び合いを実現できる。

かかわり合いの場を設定すれば、思考力・判断力・表現力が育成されるわけではない。学び合いの場で、教師が子どもに何を思考させたいのか何を発問させたいのか明確な視点を持ち、子どもをとらえて、思考させたいことを「掘り下げたり」「提案したり」することによって、子どもの思考は深まり、変容する。子どもに思考させたい視点は、活動や単元のねらいにせまるもので、活動や単元を貫く柱につながっているものと考えられる。

4 まとめ

私たちは、学び合いを通じた思考力・判断力・表現力の育成のためのよりよい保育や授業の構想や教師のはたらきかけについて研究を深めてきた。その中で、学びをいかす学習プロセスに様々な視点を当てることによって、思考力・判断力・表現力を育成していくことを探った。「学びを拓く」は、教師が構想した枠組みの中で子どもたちにどのような学びをつくらせていくかという視点から、子どもたちが自ら学びをつくりあげていくという視点に転換したものである。子どもたちの学びに対する願いは、思考力・判断力・表現力の高まりにつながる。そのためには、保育や授業の構想や教師のはたらきかけが鍵を握ることは言うまでもない。子どもたちにとって、何を思考させることが必要で、何を発問させればよいのかの見極めは、子どもをとらえることから始まる。さらに、活動や単元において、何をどのように出会わせていくのか、どのように展開してねらいにせまるのかを、教師は明確にもたなければならない。子どもの願いと教師の明確なねらいに基づいた協働的な学び合いによって、豊かな学びをつくり、豊かな「社会生活」を創造する子どもを育成したいと考える。

以上のように、学び合いの中での思考力・判断力・表現力の育成についての実践を重ねることによって、子どもの思考力・判断力・表現力の高まりと教師の役割が明らかになった。しかし、保育や授業は生き物のように変化するもので、保育や授業の中で、子どもや教師の息づかいまでも、子どもの学びを変化させることを、教師は体験してきている。だからこそ、一人一人の子どもをしっかりにとらえ、教師の担う役割の大きさを自覚して、さらなる実践を積み重ねていきたい。自ら学びを拓く子どもの姿を求めて、幼小中一貫したすべての教育活動をこれからも行っていきたい。

(文責 高橋 里美)

【参考文献等】

- ・秋田喜代美・藤江康彦『授業研究と学習過程』日本放送出版協会、2010
- ・高垣マユミ 編著『授業デザイン最前線Ⅱ』北大路書房、2010
- ・森敏昭・秋田喜代美 監訳『授業を変えるー認知心理学のさらなる挑戦』北大路書房、2009